

平成8年和敬塾・予餞会に於ける講演 平成8年12月15日

「信なき時代を生きる」毎日新聞社東京本社 取締役編集局長木戸 湊（あつむ）先生

1. 私の和敬塾生活

木戸でございます。今日はおめでとうございます。就職の決まった方がほとんどですけれども、留年の方もおられるようで、その方はまだ1年間ゆっくり楽しめるということで、これもおめでとうございます。

私は南寮の入塾です。けれども、あんまり悪かったんで西寮へ移されまして、西寮を卒業しました。当時、塾則を破るのは「木戸とあれとあれ」と3人ぐらい決まっていた。「いっぺん西寮という怖い所へ行け」ということで行かされまして、まあ無事になんとか卒業させていただいたんですけれども、いろいろ思い出がありますね。

1番の思い出は、新聞社を受験する4年生の夏に、帰省もせずに、どこへもいかずに、西寮の2階の一番外れで朝から晩まで勉強していたのを思い出します。大きな銀杏の木が横にありまして、あの辺でせみ時雨が聞こえました。一夏、二人しか寮にいなかったんです。割合淋しいものですよ。こうしてたくさんいると賑やかで愉快的なもんです。けれども、あの広い建物に二人だと心細くなってくるんです。これで、はたして試験に通るだろうかというようなことをいろいろ考えたりしました。もう一人は早稲田の建築へ行っている男で、卒業実験が何かで朝出て夕方帰ってくるんですが、それを待ちかねて、その辺の酒屋で、当時は缶ビールなんて粋なものはなかったですから、ビール瓶を1本買ってきて、二人で分けて飲むというのが楽しみだったわけです。

もう一つは60年安保ですね。もう古い話ですけれども、樺美智子さんが国会の中で亡くなった時です。あの時は僅かな本をみんな売り飛ばして、あちこちから借金をして、連日、国会へデモに行ったものです。うっかり学校へ行ったりすると早稲田の教授に叱られました。

「お前達は、目の前に政治学の教科書が生きて動いているのに、私の退屈な講義を聞きにくるな！ 国会へ行け！」と言われたのです。それで全員出席にしてくれました。

私も国会へ突入して頭から消防のホースの水をぶっかけられた。あれは痛いですよ。まともに近くでかかると、顔が吹っ飛ばんじゃないかと思うくらいです。びしょ濡れになったんで、和敬塾の風呂へ入りに帰ってきて、ラウンジでテレビを見てると、東大の女子学生が亡くなったというんで「それいけ」とまた行きました。

挙げ句の果てに、これは今初めて明かすのですけれども、丸の内警察で調べを受けたんですが、今で言うノンポリですからこういう小者をいつまでも相手にしていてもしょうがないというんで、すぐに釈放してくれました。そんな事がありました。

当時は、入社試験でも「安保デモに行ったか。」と聞かれて「行きました。」「そうか、元気があるなあ。」と、かえってプラス要因だったんです。世の中が全て騒々しく動いている時代であったというような気がします。もう一つ申し上げますと、私は早稲田ですから、60年の秋に早慶6連戦とうのがありました。早稲田には、もう亡くなりましたけれども安藤というアンダースローのピッチャーがいました。慶応は清沢というピッチャーでした。慶応は4人ピッチャーがいたんですが、早稲田はほとんど安藤一人で、勝負がつかずにとうとう6連戦になって、最後に早稲田が勝ち、新宿で大いに飲みました。これも非常に印象に残っております。これは、長尾三郎という人が文芸春秋から「神宮の森の伝説」という本を出しておりますので、一度読まれたらおもしろいんじゃないかと思えます。当時の勝負だけではなくて安保の世相とか、そろそろ所得倍増に進もうとしていた世の中とか、あるいはどういう映画や歌謡曲が流行っていたかというようなことがいろいろ書いてあります。

今の塾長、理事長のお父さんであられる前川喜作さんという人が、この和敬塾をお創りになったわけです。私たちは5、6年目の入塾だったと思えますけれども、当時は筆記試験がなかったんです。将来何になりたいかという目標がはっきりしているということ、もう一つは親があまり金持ちでないということ、この二つです。

うちの親父はしがない地方公務員でしたから、いいわけですね。次に何になりたいか。「私は新聞記者になりたい。」それだけで入れてくれたんです。十分くらいの面接で。そういう意味ではなかなか面白い連中が揃っていた。「非常に学校に近いし、施設はいいし。」ということだったんですけれども、3年生ぐらいの時に塾費が上がったんですね。そうするとブーブー言うのがでてきて「塾生大会を開こう。」ということで、私が議長に選ばれて、この壇上で前川喜作理事長を吊し上げたことがあるんです。そうしたら「君らみたいな無礼な奴は知らん。」と言って怒って帰られたことがありましたが、今から思うと誠に申し訳ないことをしたと思えます。

中国に「木は十年先を見て育てる、人は百年先を見て育てる。」ということわざがあるんですが、今はどうですか。もう卒業生が3千人ぐらいいるんでしょうか。それが全国に散らばって、お互いに「和敬塾だ。」というだけで、いろんな情報交換ができるし、助け合いができるし、ゴルフもできるということで、世の中に出られたら会社の仲間ぐらいしかつきあいのない他の人に比べると、大変な財産を背負っているというのはうれしいことです。前川喜作理事長の先見の明というか長期的展望というものが、年を取るに従ってわかってくるんです。皆さん方も今あれこれ考えておられるでしょうけれども、和敬塾の良さというのは、卒業すると共にわかってくる。スルメみたいなものですね。噛めば噛むほど味が出てくるということになるのかと思えます。

2. 政治家、官僚、企業家の墮落・腐敗時代

今日は「信なき時代」ということですが、毎日毎日、新聞を読まれて、岡光

という名前が出てこない日はありません。彼が今年の7月、厚生事務次官に就任された時に各新聞社に「今度、次官になりました。よろしく。」と挨拶に回ってきたんですが、ちょうど薬害エイズで安部が逮捕されるかどうかという頃だったのでしょうか。私が「厚生省も薬害エイズで大変ですね。」と言ったら「あれは確かにまずかった。しかし、この私が立て直しますから、しばらく時間を貸してください。」とテーブルをトントンと叩いていました。私は、これはなかなかやり手だなという印象を受けたのだけれども、非常によくしゃべる男で、まるで政治家みたいだなとも思いました。しかし、その時はすでに彩福祉グループとか、いろんな所から一億円近い現金やマンションをもらったりしていたんですね。その男が「私が立て直しますから。」というようなことをめげめげとよく言ったものだと今、驚いています。いろいろ話を聞きますと、厚生事務次官でもう上がりですから、将来は広島県へ帰って広島県知事をやるかと考えていたようです。そのためには金がいるというんで、3億か4億ぐらい貯めて広島へ戻るつもりだったようですね。そもそもその辺の根性が間違っているわけですね。

今まで日本の役人というには非常に優秀だった。政治家が駄目でも役人がしっかりしておれば日本は進路を間違えることはあるまいと我々はあらかじめ信じてきたわけですが、今の役人の在り方を見ますと、泉井事件の通産省とか、住専の大蔵省とか、汚れていない役所はないぐらいになってきたわけです。これはどういうことだと。

いろいろ考えてみますと、発端は、この近くに家がある田中角栄が、世の中の通常の慣習を破る大変な金を使い始めたというあたりなんでしょうね。あの人は大蔵大臣になった時に、部長クラスに30万、局長クラスに50万と、どんどんお祝い金を自ら配って歩いたわけです。勇気のある役人どもは返しにいったらしいんですけど、返しに行くと目をつけられてそれから先、重用してくれないので、皆もらってしまふ。1度ももらってしまふと駄目なのですね。次から次へ、それが当たり前みたいになってしまふ。そうすると他の大臣たちも同じようなことをするわけです。「田中角栄が30万なら俺は40万配ろうか。」というようなことになってくる。

実際、当時、田中角栄の外遊に付いていった新聞記者にまでそういうことが行なわれた。一緒に帰ってくると羽田あたりで、土産物をぱーっと配る。それを開けると中に真珠のネックレスなどが入っていて、みんな慌てて返しにいったわけですが、あのあたりが人と人とのつきあいに慎みをかなぐり捨ててしまったということが一つの発火点だったのではなからうかと今になって思います。

それがバブルになって燃え盛ったということだろうと思います。バブルの時は猫も杓子も土地や金にうつつを抜かして、およそ反省というものはなかったわけですね。そのツケが、バブルが弾けて3、4年経った今、いろんなところで清算を迫られておるということだろうと思います。

役人が金をもらっているんなら便宜を図れば、当然贈収賄になるわけですが、

ども、今度の厚生省の団体は、政治献金と称しているんな政治家にかなりの金を配っているわけです。これを最初に暴露したのが毎日新聞でした。

総理は「これは私の不明のいたすところであった。」と言って謝ったんですが、さる人は「政治資金規制法にのっとってきっちり手続きをしているのに何がおかしいんだ。新聞に書かれることはない。もらった時は贈った方の疑惑ははっきりしていなかった。どこがおかしいんだ。」と開き直って、毎日新聞あてに大変な抗議文をよこしております。もし誠意ある回答がなければ名誉毀損で告訴することも考えていると。私は「大いにやってくれ。」と言っています。受けて立とうじゃないかと。

どうでしょう。皆さん方。ああいう脱税をしたり、あるいは国民の税金をごまかしたり、いろんなことをして貯めた暗い金を政治家に還流している。そういう金をもらったことをまず恥じるべきじゃないでしょうかね。もらう時に、何の判断も加えずに皆もらうんですか。これじゃまるで乞食と一緒にだ。政治資金規制法にのっとってきちっと手続きしておれば、まるで問題がないと言えるんでしょうか。そういうことで政治家が務まるとは私は思いません。その辺の反省が全くない。まず「自らの手を洗い、衿を正す。」ということをしなないと、いくら政権が「行政改革に火だるまになって命を賭ける。」と言っても誰も信用しません。

こういうことでありまして、私は政治家の追求の手を絶対緩めるなということ、社会部長や政治部長に言っているわけでありまして。

私が大阪社会部のデスクの頃に「国税局の天下り税理士問題のキャンペーン」というのをやったんです。

普通の人には税理士になるのに3～5年かけて大変な試験を受けてやっと通るんですね。それも何人かに一人。それが国税局に25年ぐらい勤めていると、辞めた瞬間から税理士になれる資格ができるんです。そればかりか普通の人には税理士としてあちこちでセールスに回って、誠意を尽くして業務を引き受けて、やっと顧客を増やしていくんですけれども、国税局の天下りの税理士連中というのは、国税局幹部あるいは出先の税務署長があちこちの会社へ行行って「今度うちのこう言うのが定年になって税理士をやるんだけれども、おたくの顧問にしてやってくれ。」と頼んで回るわけです。これを断わると先々どのような税務調査をやられるかわからない。これをやれば少しは税金を負けてくれるんじゃないかというそことで、ほとんどの会社が無条件で引き受けるのです。そうすると多い人は50～60の会社の顧問になれるわけです。一つの会社が5万円としても、じーっと座って、月間2、3百万の顧問料が入ってくるようになります。

「これはおかしい、こういうことがあっていいのか。」ということで一大キャンペーンをやったわけです。それで、とうとう国税局長の首が飛んで国税庁長官が国会で陳謝して、何とか矛を収めたんですが、そのあと国税局の新しい幹部が「ひとつ手打ちをしたい。」と言うので、お互いに金を出し合って酒を飲んで「まあ、この辺でピリオドを打ちましょう。」という手打ちをしまし

た。

その時にある幹部が「木戸さん、あなたはほんとに貧しいね。お金がほとんど無いね。」と、こう言うのです。人の財布の中まで知っているのかとショックでした。

「マンションのローンも、まだ三分の一も払ってませんね。」今から20年ぐらい前、貯金がわずか37万円ぐらいあったんですが、それまで全部調べているんですな。国税局は調査権がありますから、個人の資産、財産を調べるのはお茶のこさいさいなんです。幸い私は清貧が身を救ってくれたんですけれども、もしおかしな金を岡光みたいに貯めていたら、その場であつという間に摘発されていたでしょう。仕返しをね。

それほどお役人の一家一族意識、防衛本能は強いということでもあります。ですから官僚の不正、腐敗追及に対しては、腹を括ってやらなければならないということを肝に命じているわけです。

大分前に、もと大蔵省事務次官の尾崎護という人の本を読みました。この人は立派な官僚だった。この人が「経綸のとき」という本の中で光岡八郎という日本の初代大蔵事務次官といえる人のことを書いています。

明治政府が、各藩札がバラバラで諸外国から全く信用されず、広域な商売、流通に全く役に立てないので日本中に統一したお札を造ろうということで、二条城の中に印刷したお札を山ほど貯えて、いよいよ数日後から新札を全国にばらまくという時になった。ところが各藩主にはそれぞれ利害があつて、自分のところの藩札を高く評価して欲しいとか、処分しておきたいとか、いろんなことがあつて、岩倉具視に「やめてくれ、待ってくれ。3ヶ月ほど先に延ばしてくれ。」と頼みに行ったのです。それで岩倉具視が光岡八郎を呼んで「待ちたまえ。」と言ったら、彼はその場で「よし、それじゃ私が切腹しましょう。二条城にある新札に全部火を付けましょう。それぐらいしないと日本の貨幣や札に対する信用は生じない、やるからには断固としてやる。約束した日に新札を世の中に通用させる。そうでなければ私はここで腹を切りましょう。」と言ったので、さすがの岩倉具視も「それはちょっと待ってくれ。」と言って、光岡八郎の言う通りにした。

これが日本経済の近代化の非常に大きな弾みになったと言われておるんです。

今、こういう高級官僚が世の中を探してもいるかどうか。今から2ヶ月ほど前に私が大蔵省の最高幹部ら4、5人と飯を食べた時に「木戸さん、大蔵省はどうでしょうか。」「それは改革しないと済みませんよ。よそから目茶苦茶にやられる前にまず内部からかなり大胆な改革案を出したらどうですか。それでも恐らく通用しないと思いますけれども、まず、自ら衿を正すことが最善の改革方法じゃないですか。」と言ったら、ある幹部は「わかった、もう、我々もそれに着手しております。」と言ったんですが、別の幹部は「まあ、木戸さん、そう言われるけれども、この嵐が過ぎて2、3年すれば、また我々の天下ですよ。」とはっきり言いましたね。今は嵐だからじっと身を潜めているんだと。だから私は「2、3年したら、あなた、もう役所にいないじゃないか。」

と言ってやったんですけれども、それが、こういう世の中の批判を浴びても役人たちが決して変わろうとしない心情だろうと思います。この辺を根本的に考え直す、改革するということが必要じゃないか。そのためには政治家がしっかりしなきゃならないのですが、これもなかなか時間がかかりますね、先程言いましたような調子ですから。

日本の官僚支配というのは明治維新以来です。富国強兵という目標に対してまっしぐらにいかなきゃならない「俺について来い。」ですな。ついて来ない奴は「ほれ見ろ、天皇陛下が上から見てるぞ。」と言われれば「ははあっ」といってみんなついて来た。それで大アメリカを相手に戦うような国になったことは事実なんですけど、拳げ句の果てに負けて、日本は目茶苦茶になってしまった。第二次世界大戦が終わって「さあ、これからは経済一本でいこう。追いつけ、追い越せ。」ということになって、大蔵省や通産官僚が世の中をリードして行って、かなりうまいところまで行って、世界第2の経済大国と言われるまでになったんですけれども、バブルが弾けて、またこういうことになってしまったということですね。

今や日本国は、国債、地方債合わせて440兆の借金大国なんですよ。世界一の借金大国です。私らの世代が「頼むよ。」と皆さん方に言って死んでしまったら、皆さん方がこれを何とかしなきゃならない。消費税5%の問題もそういうことなんです。5%やむなしという声が多いのは、今うまいことをしようということじゃなくて、それぐらいしないと国家の借金がどんどん増えていくだろうということなんです。国民一人当たり220万ぐらいの借金じゃないですかね。住専なんて軽いものです。

そういう時代になってきているということです。だから、よほど政治家も官僚もしっかりしてもらわなきゃならない。しかし、政治家、官僚、あるいは企業が悪いということだけで許されるかどうかということでしょうね。

日本人は昔から「寄らば大樹の陰」ということでずーっと来た。思案に余る混乱があれば偉い人が何とかしてくれるんじゃないか。水戸黄門、大岡越前待望論ですな。こういうことでありますから、我々もこの辺で、何とか今の現状を考え直して一から見直していかなきゃ、もう残された時間はあんまりないんじゃないか。

3. 自ら恃む精神を養う

この間、会田雄二さんが書いておりましたけれども、今西錦司という有名な生物の棲み分け論者と対談していて「これから500年先の日本は？」と聞いたら「500年先に日本なんてもう存在しないよ。」とはっきり言った。「どういことですか。」と聞いたら「一つは、今の世の中の仕組みの衰退ぶり、たがの弛みぶりを見てごらん。もう一つは、若者たちの元気の無さをみてごらん。こういう元気がない若者たちからますます元気がない子供が生まれる。もう日本は衰退するしかないよ。」と言ったといわれております。

今のような現状であれば、一昔前なら当然デモが起こるか、厚生省テロが起

こるか、焼き討ちが起こるか、あるいは納税拒否運動が起こる、そういうことがあっても、不思議ではなかった。今はなにもない。果たしてこれがいいのかどうか、それだけ世の中が豊かになったのか、あるいはもう臆病になってしまったのかということですね。この辺も皆さん方、ゆっくり、じっくり考え直していただきたいと思います。

バブルが弾けて住専問題で湧き立っている頃に、司馬遼太郎さんがある週刊誌で対談をしているんですが「日本はどうしてこういうことになったのでしょうか。」と聞かれて「それはね、人間は『稼いだ以上のものは使うな。』ということが永久に変わらぬ真理なんですよ。」と言っています。自分の稼ぐ能力以上に使おうとするから、こういうことになる。人様の財布を当てにしたり、あるいはごまかしたりするということです。「稼いだ以上のものを使うな。」これが永遠に変わらぬ哲学だということです。

その例として挙げているのは、明治維新から何十年しか経たない日露戦争の頃に、日本は大帝国ロシアと戦うために大変な借金を海外にしたんですね。戦争はかろうじて痛み分けだった。それから何十年、永々としてこの外債を返していったんです。当時日本にあった産業は生糸と米しかなかった。これを爪に火をともしようとして貯めて返していった。そういう日露戦争時代の日本人のように、貧しければよいと言うわけじゃないけれども「稼いだ以上のものを使わないということに徹しないと日本はまた何べんでも同じことをやりますよ。」ということを行っているわけです。

考えてみますと住専、薬害エイズ、厚生省、オレンジ共済、サラ金の武富士にからまる大蔵省の問題、泉井事件（これは通産省ですね）。今や東京編集局だけでも十指に余る大きな事件を抱えております。これからの事件捜査がもし順調に伸びれば、10人や20人ぐらいの高級役人が捕まりかねない。政治家も5人や10人は捕まりかねないという、ある意味では世紀末とも言えるかもしれない大変な世の中になっているわけです。だから司馬遼太郎は、この対談のあと間もなくもう一回対談をして「こういう調子では日本という国に将来は無いのかもしれない。」と、あの楽道家が大変な慨嘆をして、それから2週間ほど後に急死してしまいました。だから私はこれを司馬遼太郎の遺言だと受け取っておりますけれども、我々は本当に真剣に考えなきゃ大変なことになるんじゃないかと思っています。

それじゃ、これから我々はどう生きていけばいいんだろうかということですが、これは私にもわかりません。大変難しいことですが、新聞社の編集局長なんかをやっていると、褒められることは十のうち一つぐらい。ちょっと記事を書くと、あちこちから「ああでもない、こうでもない。」と注文や圧力がかかるんですが、そのためにこれを持っているんです。

これはある新聞の切り抜きで、福沢諭吉の言葉が書いてあるのです。「独立の気力なき者は必ず人に依頼す。人に依頼するものは必ず人を恐る。人を恐れる者は必ず人にへつらうものなり。」思い当たる人あるでしょう。我々だって大いに思い当たる場所があるんです。こういうことを繰り返してきたから、

今の日本は、こういうことになったんだろうと私は常々思っているわけです。この難局を突破するのは、他にもない「自ら恃む精神」である。

自分が自分に頼らなきゃ、他の人は何もしてくれない。自分でやれ、自分でしっかりやっていけということだろうと思います。

こういうことを今から百年以上も前に福沢諭吉が書いているんです。明治維新直後の日本人の心境と今の日本人はあまり変わっていないんじゃないか。民主主義とか、いろんな偉そうなことを言ってきたけれども、今やっている政も官も企業も我々一般庶民も「自ら恃む」ような人生を送ってこなかったんじゃないかなあということを考えています。私は弱い人間ですからピンチになると、これを取り出して読んで自分に鞭打つわけですが「自ら恃む精神」が必要になってくるんじゃないかと思います。

もう一つ、私は新聞記者を選んだことを全く後悔していませんし、もういっぺん生まれ変わったらまた新聞記者をやりたいと思っています。最近に入社試験の面接をしておりますと、実に頼りない。「あなたはマスコミを落ちたら、どこへ行きますか？」「銀行へ行きます。」「銀行に落ちたらどこへ行きますか？」「化粧品会社へ行きます。」はっきり言いますと、自分の進路が決まってない感じがいたします。やはり天職（calling）意識はいると思うんですね。

私がインドネシアで特派員をやっております時に、インドネシアの反骨のジャーナリストでモフタル・ルビスという人がいました。この人といろいろおつきあい願って、最後に別れる時に彼が言ったことを未だに覚えているんですが「お互いに天職を忘れないでいこうや。弱きを助け、正しいことを書いていこうや。もしその天職を忘れそうになったら、これ（彼の家の庭には真っ赤な火炎樹があったんです）を思い出してくれ。赤道を挟んでお互いに国は分かれるけれどもそういうつもりで仕事をしていこうじゃないか。」と言われたんです。Callingというのは非常に大事なことだと思います。この一事に賭けるといふ気持ちがこれから必要になってくるんじゃないかと思うんです。

それからもう一つ、新聞作りの時に、いつも私は一線の記者たちに「喜怒哀楽を忘れるな。」と言っているんです。ただ単にあつた出来事を右から左に「ありました。」と記事に書くんじゃないしに「その中に自分の感情移入をしろ。」と。「客観的事実（5W1H）はそのまま書いていいけれども、その行間に、あるいはそれにプラスして、これは果たしてこれでいいのか、悪いのか、もっとこうすればいいんじゃないかなろうかというようなことをどんどん書いていってくれ。よくやった人にはよくやったと書いてやってくれ。」庶民感情、喜怒哀楽です。みんな私の名前をもじって「木戸カラー」と言っていますが。その瞬間、瞬間、湯沸器みたいに喜怒哀楽を發揮するんじゃないくて、歴史感がいるだろうと。

これは我々も反省しなければならないんですけれども、田中角栄が総理になった時に「今太閤が誕生した。」と言って新聞が褒めそやして筆を連ねたわけです。ところがその数年後に金脈事件で失脚してしまつた。彼も百点満点の政治家ではなかったんです。この間のバブルもそうです。新聞も「最もたやすい財

テク法」みたいなことを経済面に載せていたわけですから、これは大いに恥じなきゃならない。歴史は必ずしもそう単純なものじゃない。山があれば谷もある。くるっとUターンして来ることもあれば繰り返しもある。そういうことを踏まえながら、なおかつ喜怒哀楽を忘れないで紙面を作ってくれと言っているんですが、これは生き方にも通用するんじゃないかと思ってます。

4 . 信なき時代の若者の生き方

皆さん方、これから社会に出られる方が多いわけですから申し上げますけど、一番大事なことは辛抱すること、我慢することですな。誰でも三日か3ヶ月ぐらいで辞めたくくなりますよ。今までみたいに自由に伸び伸び、怖いものは誰もいないという生活ではないわけですから、これは大変しんどい。自分が一生懸命やっているつもりでも、本当に仕事ができない。自分が百できるなど思っているも十もできればいいほうです。そんな時にちょっとしたけつまずきがあるとあっさり投げ出してしまう人が多い。

かく言う私もそういうことがありました。ここでも前に申し上げたことがあるのですが、入社して1年目ぐらいに、ある暴力団員がある市の防犯委員になったんです。暴力団リストを見せてもらった上で「これはけしからん。」と書いたんですが、その暴力団員が抗議してきた。「あの記事が出る前の日か、前々の日に私は暴力団をやめた。親分にも杯を返した。」親分も「確かにそうだ。」と言うのです。そして「何を根拠に暴力団員と書いたのか。」と名誉毀損で告訴されたのです。それが暴力団の知り合いの県会議員の知るところとなって、県会でまた大騒ぎをしました。「けしからん。毎日新聞に暴力団と書かしたのは県警本部に違いない。県警本部はいかなる基準でそういうことを書かしたのか。」と。そうすると県警本部長はびびり上がって「毎日新聞にそういうことを洩らしたことはない。暴力団リストというのは、あるとも無いとも言えない。」と言って逃げてしまったので、毎日新聞だけが悪者になって、私が辞めなければならぬかもしれないという事態になりました。

私は当時23、4歳でしたけれども、まず当時の支局長に「社に迷惑をかけました。」と辞表を出して、「しかし1ヶ月、時間を貸してください。1ヶ月経って駄目なら、受理してください。」と言いました。その間、県警の暴力団担当の刑事の所へ朝夜と詰めかけた。ちょうど20日ぐらいたった時に向こうが根負けして「今晚、俺は泊まりだから、もう家に来ないでくれ。そのかわり、署に来てくれてもいい。」と言うので、署に行ったのです。そうしたら広いデカ部屋の隅の方にその刑事がいて、雑談していたんですが「俺は今から地下の風呂へ行って来るから、この辺の書類がなくならないようによく見ておいてくれ。」と言う。今ならすぐピンと来るんですけども、私は2、30分ポカーンと座っていて、そのうちにふと机の上を見ると、暴力団リストの問題の男のところを開けて置いてくれてあったんです。今ならコピーという便利なものがありますが、それを急いで接写レンズで撮って、支局で焼き付けをした時はうれしさが手が震えましたね。それを検察庁へ持って行って「どうだ。警察はこう

いう物をきっちり持っているじゃないか。私はこれを見た上で記事を書いたんだ。」と。それで不起訴処分になったんです。

これは私の人生の初期の頃、最大のピンチだったですね。もしそれが手に入らなければ、今頃、こうして皆さん方に話していることもあるまいと思います。やはり「しんどい時ほど粘れ。」ということです。粘りに粘れば必ずそれに報いてくれるものが現れてくるということを、最初に申し上げておきたい。

もう一つは、いろいろな方がおられるでしょうけれども、非常時、非常事態は必ずあります。私に言わせれば、この前の阪神大震災はまさに非常時だったですね。大阪の編集局長をやっておりましたが、この世の終わりかと思うほど揺れました。

皆さんこれから先ああいう時に、もし結婚していたら、必ず女房の腕くらい握ってやらなきゃいけない。うちのマンションの隣のおやじは自分だけぱーっと飛び出して行って、余震が来ないのがわかってから戻ってきて「おーいどうした。」と言ったものですから、奥さんに一週間も飯を食わしてもらえなかった。私は逃げたわけじゃなくてお互いにしがみついて起き上がれなかった。起き上がれないくらい揺れた地震は初めてです。さあ、その後、号外を出さなきゃならない。最初のうちは電話が通じた。「輪転機は回るか？」と言ったら「回る。」と言うんで、私はすぐマイカーで社まで行きました。普段なら1時間で行けるところを3時間半かかって。途中、窓をトントン叩く人がありから、見たら、三和銀行の某幹部が自転車で汗だくで死に物狂いで走っているわけです。車が運転できなければ、あとは交通手段がないわけですね。「木戸さん、乗せてください。」と言うから、私はそこでちょっといたずら心を起こして窓をちょっと開けて「これから、いくらでも金を貸すか？」と言った。毎日新聞のメインバンクは三和銀行ですから。そうしたら「貸します、貸します。」と言って手を合わせて拝んだので「よし、それなら乗せてやろう。」と大笑いしたことがありました。

会社には10人のうち2人ぐらいしか出てきていなかった、100人のうち20人ぐらい。200人なら40人ぐらいしかでてこなかったの、出てきた人はそれぞれに才覚を働かしていた。中には西宮から魚船を4人ほどでチャーターしてやってきた人もありました。道路は通じない、電車は止まっている。

そういう非常時というのは、単なる知識の積み重ねじゃ駄目なんですね。佐々淳行さんという人を知っていますか。元警視庁の公安警備で活躍した方で、東大紛争や連合赤軍の浅間山荘事件の前線キャップだった人です。大変な知恵と集中力の人ですけれども「人間には、人生のうちに危機的状況が3回か4回はあるだろう。そういう時に日頃の生半可な知恵ではとても対処しきれない。断片情報を素早く集めて、本能的に行動を決定し得る知恵。これをある学者は生体環境情報適応能力と言っている。こういうものを身につけなきゃ駄目だ。」ということです。一種の決断力と言えましょかね。

話はさかのぼりますけれども、毎日新聞は阪神大震災の時に「希望新聞」というものを本紙の中に2ページから4ページ作って、震災被害者のための情報

を満載しました。どこそこへ行けばガソリンを売っている、どこの風呂屋が開いている、医者はどこそこへ行けば大丈夫だと。お互いに生きているか、死んでいるかの情報もどんどん公開して載せたんです。これは爆発的な人気を得たんですけれども、これを地震直後にあっという間に発案してくる記者がいたんです。

そういう記者ほど普段あまり目立たない。机上の事務能力のある、一見真面目そうにせっせと働いている記者ほど、こういう非常時の時には役に立てなかったという鮮烈な思いを私は持っています。非常時に決断できるほんの一握りの知恵者が5人もいれば、大抵の組織は大丈夫でしょう。あの震災で私は人を見る目は一面的じゃだめだなと思いました。普段こつこつと真面目にやる優等生というのは、かわいいんだけど、とっさの場合に役に立つかどうかは別です。とっさの場合にいろんな知恵を出して役に立つのは、普段酒を飲んで馬鹿なことを言っている、のんびりしているけれど、どこか余裕のある男ですね。そういう非常時の知恵を絞り出せる人間力がこれからは必要になってくるでしょう。

それから、在学中は一生懸命勉強したけれども、会社へ勤めたらもうなにも勉強しないという人がいます。

我々の同期入社でも、1番で入った人が会社へ入ったら、週刊誌に目を通すかテレビを見るだけになった。こういう人間は5年ぐらいで下降線をたどりますね。大学で貯えた知恵、学んだことは卒業して5年ぐらいしか持ちません。だから枯渇しないようにどんどん自己開発していかなきゃならない。そのために自己投資を絶対に怠ってはなりませんね。これは自分の給料に比べて贅沢だなと思っても、どんどん本を買って読むとか、あるいは旅行に出かけて見聞を広める。そういう自己投資、自己開発が絶対必要じゃないかと思います。

私も新聞記者30何年のうち、体が丈夫だからということで20年ぐらい事件記者をやらされた。大阪府警や東京の警視庁など回りますと、朝10時から夜中の2時ぐらいまで働くんです。それから帰って寝て、また朝8時頃起きて出てくるわけですから、大体2・3年ぐらいすると病気になるんですけれども、私はそれを10年間ほどやりました。その間に一生懸命、朝15分ぐらい英字新聞を読んだり、通勤途中で英語のニュースを聞いたりして、何とか片言でも英語が読み書きできるようになりました。その上で「外信部へ行かしてくれ。」と言ったら行かしてくれた。これによって私の新聞記者としての展望や見聞がいかに開けたことか。それまでつきあった相手は刑事か検事か裁判官か、あるいは悪い犯罪者ぐらい、どちらかと言うと人生のダークサイドしか見えなかった。それが世界12、3カ国のあちこちを回って、いろんなことを勉強する機会を得たということです。

自己開発、自己改革を常に心がけていただきたい。あるモスクワ特派員がいみじくも言っています。「自己改造、自己改革を忘れた組織や国は必ず歴史に裁かれる。」と。これは、旧ソ連を見ても明らかですね。われわれ人間は世の中から捨てられることになっていくんでしょう。

先だって井伏鱒二と開高健の対談集を読んでいましたら、どちらも釣りマニアですが、魚の世界でも面白いらしいです。ハヤがずーっと群れながら川を上って行って、息が切れて遅れると岩陰からイワナが出てきてパックと食べてしまうんだそうです。これを井伏鱒二は「人間と同じですな。」と言うんですね。これは非常に恐ろしい話ですけれども、多分の真実を含んでいます。

「信なき時代」という非常に難しいタイトルにしましたのは、私自身もいろいろ考えてみたかったのです。ボランティアグループを背景にしている政治家は「納税者こそ情報を操る主人公でなければならない。」ということで、非常に情報公開を追っています。そして「役人や政治家やいろんなものを変えていくためには市民が連帯しなければならない。」と言っています。この2つについては、私は間違っていないと思います。

先程も申し上げたように、日本人は昔から権威に弱い、集団に服従する、あるいは偉い人に依存する傾向があるんですけれども、これからはやはり、まず「自ら恃む」ということを念頭に置きながら、連帯できるものは「個と個」として連帯していく時代にさしかかるんじゃないかなと思います。

いまや権威は地に落ちている。政治家しかり、官僚しかり、権威は音を立てて崩れつつあるわけです。日本には昔から神というものがいないわけですから、今何を信じるかと言ったら自分自身しかない。そして自分自身と他人が共通できるところがあれば、その良いところ、前向きのところで手をつなぎ合って連帯していくことしかないんじゃないかと私は思っているわけでありませう。

私は、司馬遼太郎が亡くなってから彼に凝って、あらゆる本を集めて一生懸命読んでいます。あの人は初めてアメリカへ行っても、デトロイトの工場労働者とあつという間に話が通じて仲良くなる。あるいはロシアへ行っても、ロシアの農夫のおかみさんとあつという間に肝胆相照らし、素晴らしい紀行文「アメリカ素描（デッサン）」などを書いています。

その秘訣をある人に尋ねられて彼がどう言っているかということ、一つは「相手の立場に身を移す。」、感情移人と言ってもいいですね。そういうトランス能力であると。ある人と初めて話をする。「あなたはご出身はどこですか?」「愛知県です。」「大学は?」「早稲田です。」「ご両親はなにをされました?」三言、四言聞くだけで、大体この人は何を考えているか、どういう育ちであるか、これから何をしたいと思っているかということを感じることができるトランス能力ですね。感情移人、感情が乗り移る。そう能力が一つです。もう一つはその人がしゃべったこと以外に本当はなにを言いたかったのか、しゃべらなかつたことと言いたかつたことがあるんじゃないか。言いたいことがここまで来ているけれども黙っていることがあるのじゃないか。そういう言外の意を察するイマジネーション（想像力）。

「『トランス能力』と『イマジネーション』があれば、私の語学力は非常につたないけれども、どこの国のどんな人とでも大体対話ができると思いますよ。」と言っています。これは我々人間が生きていく上でも、皆さん方がこれから社会へ出られる時でも大変参考になることだと思います。

若い時は得てして自分のしゃべりたいことだけしゃべり、相手のことは聞かないというようなことがあります。この年寄りの先輩が「トランス能力とイメージーション」「言外の意を察する」ということを言ったなあということだけを覚えておいてください。私もこの年になって初めて「ああ、なるほど」と思ったぐらいですから、皆さん方は今、覚えておいていただければありがたいと思います。

今月号の「文芸春秋」で野茂選手と仰木監督が対談していますので、これを読んでごらんになったら面白いです。

野茂選手が近鉄に入る時に「私のフォームだけは絶対に変えないでください。」と言っているわけです。大リーグへ行ってもドジャースのコーチに同じことを言っています。人間一つぐらい、誰に何と言われても曲げないものがあるのもいいのじゃないか。これは頑固とは違います。自負心だろうと思います。そういうものも大事です。曲げないものを育てて、自分の自信にしていこうのほうがいいかもしれませんけれども、そういうものを持たれることを是非お勧めしたいなあと思います。

皆さん方は、マラソンで言えば10キロ走った頃でしょう。それも自分で走ったんじゃないし、5キロぐらいは親や先生たちに引っ張られて走ってきた。これからが人生勝負。20キロ、30キロということになってこようかと思いますが、どうか42.195キロの人生を是非完走していただきたいし、自分が設けた目標を達成するという勝利を勝ち取っていただきたい。「楽しんでオリンピックへ行きました。勝負は論外です。」というようなことにはならないでいただきたい。人生というゲームにおいて、勝者たるべく努力をしていただきたいと思うわけです。

30何年も年の違う先輩の勝手な言葉を最後までお聞きいただきありがとうございます。ご健闘を祈りたいと思います。

1